

縷紅新草

泉鏡花

青空文庫

あれあれ見たか、

あれ見たか。

二つ蜻蛉とんぼが草の葉に、

かやつり草に宿をかり、

人目しのぶと思えども、

羽はうすものかくされぬ、

すきや明石あかしに緋ひぢりめん、

肌のしろさも浅ましや、

白い絹地の赤蜻蛉。

雪にもみじとあざむけど、

世間稲妻、目が光る。

あれあれ見たか、

あれ見たか。

「おじさん——その提灯……」

「ああ、提灯……」

唯今、午後二時半ごろ。

「私が持ちましょう、磴に打撞りますわ。」

一肩上に立つた、その肩も裳も、嫺な三十ばかりの女房が、白い手を差向けた。

お米といって、これはそのおじさん、辻町糸七——の従姉で、一昨年世を去ったお京の娘で、土地に老舗の塗師屋なにがしの妻女である。

撫でつけの水々しく利いた、おとなしい、静な円鬘で、頸脚がすつきりしている。

雪国の冬だけれども、天気は好し、小春日和だから、コオトも着ないで、着衣のお召で包むも惜しい、色の清く白いのが、片手に、お京——その母の墓へ手向ける、小菊の黄菊と白菊と、あれは侘しくて、こちこちと寂しいが、土地がら、今時はお定りの俗に称うる坊さん花、薊の軟いような樺紫の小鶏頭を、一束にして添えたのと、ちよつと色紙の二本たばねの線香、一銭蠟燭を添えて持った、片手を伸べて、「その提灯を」といっ

たのである。

山門を仰いで見る、処々、壊え崩れて、草も尾花もむら生えの高い磴を登りかかった、お米の実家の檀那寺——仙晶寺というのである。が、燈籠寺といつた方がこの大城下によく通る。

去ぬる……いやいや、いつの年も、盂蘭盆に墓地へ燈籠を供えて、心ばかり小さな燈を灯すのは、このあたりすべてかわりなく、親類一門、それぞれ知己の新仏へ志のやりとりをするから、十三日、迎火を焚く夜からは、寺々の卵塔は申すまでもない、野に山に、標石、奥津城のある処、昔を今に思い出したような無縁墓、古塚までも、かすかなしめつぽい苔の花が、ちらちらと切燈籠に咲いて、地の下の、灰白い寂しい亡霊の道が、草がくれ木の葉がくれに、暗夜には著く、月には幽けく、冥々として顕われる。中でも裏山の峰に近い、この寺の墓場の丘の頂に、一樹、榎の太木が聳えて、その梢に掛ける高燈籠が、市街の広場、辻、小路。池、沼のほとり、大川縁。一里西に遠い荒海の上からも、望めば、仰げば、佇めば、みな空に、面影に立つて見えるので、名に呼んで知られている。この燈籠寺に対して、辻町糸七の外套の袖から半間な面を出した昼間の提灯は、松風に颯と誘われて、いま二葉三葉散りかかる、折からの緋葉も灯れず、ほかほかと暖い磴の

小草こくその日だまりに、あだ白けて、のびれば欠伸あくび、縮むと、嚏くしゃみをしそうで可笑おかしい。

辻町は、欠伸と嚏を緬なえたような掛声で、

「ああ、提灯。いや、どっこい。」

と一段踏む。

「いや、どっこい。」

お米が莞爾にっこり、

「ほほほ、そんな掛声が出るようでは、おじさん。」

「何、くたびれやしない。くたびれたといったって、こんな、提灯の一つぐらい。……もつとも持重りがしたり、邪魔になるようなら、ちよつと、ここいらの薄すすきの穂へ引掛ひっかけて置いても差支えはないんだがね。」

「それはね、誰も居ない、人通りの少い処だし、お寺ですもの。そこに置いといたって、人がどうもしはしませんけれど。……持ちましようというのに持たさないで、おじさん、自分の手で……」

「自分の手で。」

「あんな、知らない顔をして、自分の手からお手向けなさりたいのでしよう。ここへ置い

て行つては、お志が通らないではありませんか、悪いわ。」

「お叱言こごとで恐入るがね、自分から手向けるつて、一体誰だい。」

「それは誰方どなただか、ほほほ。」

また莞爾にっこり。

「せいせい、そんな息をして……ここがいい、ちよつとお休みなさいよ、さあ。」

ちよつと段々なかつぎ中継の一土間、向棧敷むこうさじきと云つた処、さかりに緋葉した樹の根に寄つた方で、うつむき態なりに片袖をさしむけたのは、縫ぬいれ、手を取ろう身構えで、腰を靡な娜なに振向いた。踏掛けて塗下駄ぬりぞに、模様ようばうの雪輪ゆきりんが冷くかかつて、淡紅たんこうの長襦袢ながじゆばんがはらりとこぼれる。

媚なまめしさ、というといえども、お米はおじさんの介添のみ、心にも留めなそうだが、人妻ひとつまなれば憚はばられる。そこで、件くだんの昼提灯ひるぢやうぢやうを持直すと、柄えいの方を向うへ出した。黒塗くろぬりの柄えいを引取つたお米の手は、なお白くて優しい。

憚おこられもしようもの。磴いたるや、山賊いの構おえた巖いわの砦とりでの火見ひのみの階子はしごと云つてもいい、縦た横た町条まちぢやうの家やごとの屋根、辻つじの柳やなぎ、遠おちこち近ちかの森もりに隠かく顕けんしても、十町三方、城下じやうぢやうを往来わらいの人々ひとが目を敵そばだつれば皆見える、見たその容ようす子は、中空ちゆうくうの手摺てすりにかけた色小袖いろこさそでに外套がいとうの熊蟬くまぜんが

留つたにそのままだろう。

蟬はひとりでジジと笑つて、緋葉もみじの影へ翻然ひらりと飛移つた。

いや、翻然となんぞ、そんな器用に行くものか。

「ありがとう……提灯の柄のお力添に、片手を纏つて、一方に洋杖ステツキだ。こいつがまた素人が拾つた權かゝいのようで、うまく調子が取れないで、だらしなく袖へ搔かゝこ込んだ処は情ない、まるで両杖りようづえの形だな。」

「いやですよ。」

「意気地はない、が、止むを得ない。お言葉に従つて一休みして行こうか。ちようどお詔あつらえ、苔こけなめらか滑……というと冷いが、日当りで暖い所がある。さてと、ご苦勞を掛けた提灯を、これへ置くか。樹下石上というと豪勢だが、こうした処は、地藏盆むしろに筵かねを敷いて鉦かねをカンカンと敲たたく、はっち坊主そのままだね。」

「そんなに、せつかちに腰を掛けてさ、泥がつきますよ。」

「構わない。破れ麻やだよ。たかが墨染にて候だよ。」

「墨染でも、喜撰でも、所作舞台ではありません、よごれますわ。」

「どうも、これは。きれいなその手巾ハンケチで。」

「散っているもみじの方が、きれいです、払っては澄まないような、こんな手巾。」

「何色というんだい。お志で、石へ月影まで映して来た。ああ、いい景色だ。いつもこころは、といううちにも、今日はまた格別です。あいかわらず、海も見える、城も見える。」

といった。

就中、公孫樹は黄なり、紅樹、青林、見渡す森は、みな錦葉を含み、散残った柳の

緑を、うすく紗に綾取つた中に、層々たる城の天守が、遠山の雪の巔を抽いて聳える。そ

こから斜に濃い藍の一線を曳いて、青い空と一刷に同じ色を連ねたのは、いう迄もなく

田野と市街と城下を巻いた海である。荒海ながら、日和の穏かさに、渚の浪は白菊の花を

敷流す……この友禪をうちかけて、雪国の町は薄霧を透して青白い。その袖と思う一端に、

周囲三里ときく湖は、昼の月の、半円なるかと視められる。

「お米坊。」

おじさんは、目を移して、

「景色もいいが、容子がいいな。——提灯屋の親仁が見惚れたのを知ってるかい。

（その提灯を一つ、いくらです。）といったら、

（どうぞ早や、お持ちなされまして……お代はおついでの時、）……はどうだい。そのか

わり、遠国他郷のおじさんに、売りものを新聞づつみ、紙づつみにしようともしないんだぜ。豈あにそれ見惚れたりと言わざるを得んやだ、親仁。」

「おつしやい。」

と銚子ちようしのかわりをたしなめるような口振で、

「旅の人だか何だか、草鞋わらじも穿はかないで、今時そんな、見たばかりで分りますか。それだし、この土地では、まだ半季勘定がございます。……でなくつてもさ、当寺おてらへお参りをする時、ゆきかえり通るんですもの。あの提灯屋さん、母に手を曳ひかれた時分から馴染なじみです。……いやね、そんな空からお世辞をいって、沢山。……おじさんお参りをするのに極きまりが悪いもんだから、おだてごかしに、はぐらかして。」

「待った、待った。——お京さん——お米坊、お前さんのお母つかさんの名だ。」

「はじめまして伺います、ほほほ。」

「ご挨拶、恐入った。が、何々院——信女でなく、ごめんを被ろう。その、お母さんの墓へお参りをするのに、何だつて、私がきまりが悪いんだらう。第一そのために来たんじゃないか。」

「……それはご遠慮は申しませんの。母の許とこへお参りをして下さいますのは分っています

けれどもね、そのさきに——誰かさん——」

「誰かさん、誰かさん……分らない。米ちゃん、一体その誰かさんは？」

「母が、いつもそういつていましたわ。おじさんは、（極りわるがり屋）という（長い屋）さんだから。」

「どうせ、長屋住居ずまいだよ。」

「ごめんなさい、そんなじやありません。だからつても、何も私に——それとも、思い出さない、忘れたのなら、それはひどいわ、あんまりだわ。誰かさんに、悪いわ、済まないわ、薄情よ。」

「しばらく、しばらく、まあ、待つておくれ。これは思いも寄らない。唐突の儀を承る。弱つたな、何だろう、といつちやなお悪いかな、誰だろう。」

「ほんとに忘れたんですか。それで可いいんですか。嘘でしょう。それだとあんまりじやありませんか。いつそちゃんと言いますよ、私から。——そういつても釣出しにかかつて私の方が極りが悪いかも知れませんが……。……おじさん、おじさんが、むかし心中をしようとした、婦人おんなのかた。」

「……………」

藪やぶから棒をくらつて膨らんだ外套の、黒い胸を、辻町は手でおさける真似して、目をみはると、

「もう堪忍してあげましょう。あんまり知らないふりをなさるからちよつと驚おどかしてあげただけれど、それでも、もうお分りになつたでしょう。——いつかの、その時、花の盛さかりの真夜中に。——あの、お城の門のまわり、暗い堀の上を行つたり、来たり……」

お米の指が、行つたり来たり、ちらちらと細く動くと、その動くのが、魔法を使つたように、向う遥はるかな城の森の下ぐぐりに、小さな男が、とぼんと出て、羽織も着ない、しよぼけた形をあらわすとともに、手をこまぬ拱き、首を垂れて、とぼとぼと歩ある行くのが、臙おぼろに見える。それ、糧に飢えて死のうとした。それがその夜の辻町である。

同時に、もう一つ。寂しい、美しい女が、花の雲から下りたように、すつと翳かげつて、おなじ堀を垂たら下らりに、町へ続く長い坂を、胸を柔やわかに袖を合せ、肩を細ほりと裙すそを浮かせて、宙ただよに漾たうばかり。さし俯うつむ向いた頸えりのほんのり白い後姿で、捌さばく棲つまも揺ゆらぐと見えない、もの静かな品の好よさで、夜はただ黒し、花明り、土の筏いかだに流るるのように、満開の桜の咲さ蔽おほうその長坂を下りる姿が目映あつた。

——指を包め、袖を引け、お米坊。頸の白さ、肩のしなやかさ、余りその姿に似てなら

ない。――

今、目のあたり、坂を行く女は、あれは、二十ばかりにして、その夜、（鳥をいう）千羽ヶ淵で自殺してしまつたのである。身を投げたのは潔い。

卑怯な、未練な、おなじ処をとぼつた男の影は、のめのめと生きて、ここに仙晶寺の礎の中途に、腰を掛けていたのであつた。

二

「ああ、まるで魔法にかかつたようだ。」

頬にあてて打傾いた掌を、辻町は冷く感じた。時に短く吸込んだ煙草の火が、チリリと耳を掠めて、爪先の小石へ落ちた。

「またまつたく夢がさめたようだ。――その時、夜あけ頃まで、堀の上をうろついて、いつ家へ帰つたか、草へもぐつたのか、蒲団を引被つたのか分らない。打ちめされたようになつて寝た耳へ、

――兄さん……兄さん――

と、聞こえたのは、……お京さん。」

「返事をしましょうか。」

「願おうかね。」

「はい、おほほ。」

「申すまでもない、威勢のいい若い声だ。そうだろう、お互に二十の歳です。——死んだ人は、たしか一つ上だったように後で聞いて覚えている。前の晩は、雨気を含んで、花あかりも朦朧と、霞に綿を敷いたようだった。格子戸外のその元気のいい声に、むつくり起きると、おつと来たりで、目は窪んでいる……額をさきへ、門口へ突出すと、顔色の青さを烘られそうな、からりとした春爛な朝景色さ。お京さんは、結いたての銀杏返で、半襟の浅黄の冴えも、黒縹子の帯の艶も、霞を払ってきつぱりと立っていて、（兄さん身投げですよ、お城の堀で。）（嘘だよ、ここに生きてるよ。）と、うっかり私が言ったんだから、お察しものです。すぐ背後の土間じゃ七十を越した祖母さんが、お櫃の底の、こそげ粒で、茶粥とは行きません、みぞれ雑炊を煮てござる。前々年、家が焼けて、次の年、父親がなくなつて、まるで、掘立小屋だろう。住むにも、食うにも——昨夜は城のここかしこで、早い蛙がもう鳴いた、歌を唄つてる虫けらが、およそ羨しい、と云つた

場合。……祖母さんは耳が遠いから可かつたものの、（生きてるよ。）は何事です。（何を寝惚ねぼけているんです。しつかりするんです。）その頃の様子を察しているから、お京さん——ままならない思遣りのじれつたさの疔癩かんしやくすじ筋で、ご存じの通り、一うちいちの眉ひそを顰ひそめながら、（……町内ですよ、ここの。いま私、前を通つて来たんだけど、角の箔屋はくや。——うちの人じゃあない、世話になつて、はんけちの工場こうばへ勤めてる娘さんですよ。ちやんと目をあいて……あれ、あんなに人が立つている。）うらかな朝だけれど、路みちがひとすじ、胡粉ごこんで泥塗だみたように、ずっと白く、寂然しんとして、家やならば、三町ばかり、手前てまへでもとおなじ側かわです、けれども、何だか遠く離れた海際うみぎまで、突抜けになつたようで、そこに立つている人だから——身を投げたのは淵ふちだというのに——打つて来る波を避けるように、むらむらと動いて、地つちがそこばかり、ぐつしより汐しほに濡れているように見えた。

花はちらちらと目の前へ散つて来る。

私の小屋と真向まむかいの……金持は焼けないね……しもた屋の後妻うわなりで、町中の意地悪いぢあくが——今時はもう影もないが、——それその時飛んで来た、燕の羽の形に後うしろを刎はねた、橋はし鬚まげとかいうのを小さくのつけたのが、門かどの敷石しきいしに出て来て立つて、おなじように箔屋はくやの前まへを熟じつとすかして視みていた。その継娘まますめは、優しい、うつくしい、上品な人だったが、二十はたち

にもならない先に、雪の消えるように白梅と一所に水で散った。いじめ殺したんだ、あの継母がと、町内で沙汰をした。その色の浅黒い後妻の眉と鼻が、箔屋を見込んだ横顔で、お米さんの前髪にくっつき合った、と私の目に見えた時き。(いとしや。)とその後妻が、(のう、ご親類の、ご新姐さん。)——悉しくはなくても、向う前だから、様子は知ってる、行来、出入りに、顔見知りだから、声を掛けて、(いつ見ても、好容色なや、ははは。)と空笑いをやったとお思い、(非業の死とはいうけれど、根は身の行いでござりますのう。)とじろりと二人を見ると、お京さん、御母堂だよ、いいかい。怪我にも真似なかなさんなよ。即時、好容色な頤を打つけるようにしやくって、(はい、さようござります、のう。)と云うが疾いか、背中の子。」

辻町は、時に、まつげの深いお米と顔を見合せた。

「その日は、当寺へお参りに来がけだったのでね、……お京さん、礎が高いから半纏おんぶでなしに、浅黄鹿の子の紐でおぶっていた。背中へ、べっかつこで、(ばあ。)というと、カタカタと薄齒の音を立てて家中へ入ったろう。私が後妻に赤くなつた。

負っていたのが、何を隠そう、ここに好容色で立っている、さて、久しぶりでお目にかかります。お前さんだ、お米坊——二歳、いや、三つだったか。かぞえ年。」

「かぞえ年……」

「ああ、そうか。」

「おじさんの家の焼けた年、お産間近に、お母さんが、あの、火事場へ飛出したもんですから、そのせいですって……私には痣が。」

睫毛がふるえる。辻町は、ハツとしたように、ふと肩をすくめた。

「あら、うつかり、おじさんだと思つて、つい。……真紅でしたわ、おとなになつて今じや薄りとただ青いだけですの。」

おじさんは目を俯せながら、わざと見まもつたようにこういった。

「見えやしない、なにもないじゃないか、どこなのだね。」

「知らない。」

「まあさ。」

「乳の少し傍のところ。」

「きれいだな、眉毛を一つ剃つた痕か、雪間の若菜……とでも言っていないと——父がなくなつて帰つたけれど、私が一度無理に東京へ出ていた留守です。私の家のために、お京さんに火事場を踏ませて申訳がないよ。——ところで、その嬰兒が、今お見受け申すお

姿となつたから、もうかれこれ三十年。……だもの、記憶おぼえも何も臙おぼろ々とした中に、その悲しいうつくしい人の姿に薄明りがさして見える。遠くなつたり、近くなつたり、途中で消えたり、目先へ出たり——こつちも、とぼとぼと死場所を探していたんだから、どうも人目が邪魔になる。さきでも目障りになつたろう。やがて夜中の三時過ぎ、天守下の坂は長いからね、坂の途中で見失つたが、見失つた時の後姿を一番はつきりと覚えてゐる。だから、その人が淵で死んだとすると、一旦いったん町へ下りて、もう一度、坂を引返ひっかえした事になるんだね。

ただし、そういった処で、あくる朝、町内の箔屋へ引取つた身投げの娘が、果して昨夜ゆうべ私が見た人と同じだかどうだか、実の処は分りません……それは今でも分りはしない。堀端では、前後一度だつて、横顔の鼻筋だつて、見えないばかりか、解りもしない。が、朝、お京さんに聞いたばかりで、すぐ、ああ、それだと思つたのも、おなじ死ぬ氣の、氣で感じたのであろうと思う……

と、お京さんが、むこうの後妻うわなりの目をそらして、格子を入つた。おぶさつたお前さんが、それ、今のべつかつこで、妙な顔……」

「ええ、ほほほ。」

とお米は軽く咲容えまして、片袖を胸へあてる。

「お京さん、いきなり内の祖母ばあさんの背中を一つトンと敲たたいたと思うと、鉄鍋てつなべの蓋ふたを取つて覗のぞいたつけ、勢いきおいのよくない湯気が上る。」

お米は軽く鬢びんを撫なでた。

「ちよろちよろと燃えてる、竈かまどの薪木たきぎ、その火だがね、何だか身を投げた女ひとをあぶつて暖めているような気がして、消えぎえにそこへ、袖そでづま褌もつを纏もつれて倒れた、ぐつしより濡れた髪と、真白な顔が見えて、まるでそれがね、向う門かどに立っている後妻うわなりに、はかない恋をせかれて、五年前に、おなじ淵に身を投げた、優しい姉さんのようにも思われた。余程どうかしていたんだね。

半壊れの車井戸が、すぐ傍そばで、底の方に、ばたん、と寂しずくしい雫の音。

ざらざらと水が響くと、

——身投げだ——

——別嬪べっぴんだ——

——身投げだ——

とおもてと戸外おもてを喚わめいて人が駆けた。

この騒ぎは——さあ、それから多日、四方、隣国、八方へ、大波を打つたろうが、

——三年の間、かたい慎み——

だつてね、お京さんが、その女の事については、当分、口へ出してうわささせしなれば、また私にも、話さえさせなかつたよ。

——おなじ桜に風だもの、兄さんを誘いに来ると悪いから——

その晩、おなじ千羽ヶ淵へ、ずぶずぶの黥間だったのに、なまじ死にはぐれると、今さら気味が悪くなつて、町をうろつくにも、山の手の辻へ廻つて、箔屋の前は通らなかつた。

……

この土地の新聞一種、買つては読めない境遇だったし、新聞社の掲示板の前へ立つにも、土地は狭い、人目に立つ、死出三途ともいう処を、一所に徜徉つた身体だけに、自分から気が怯けて、避けるように、避けるように、世間のうわさに遠ざかったから、花の散つたのは、雨か、嵐か、人に礫を打たれたか、邪慳に枝を折られたか。今もつて、取留めた、悉しい事は知らないんだが、それも、もう三十年。

……お米さん、私は、おなじその年の八月——ここいらはまだ、月おくれだね、盂蘭盆が過ぎてから、いつも大好きな赤蜻蛉の飛ぶ時分、道があいて、東京へ立てたんだが。——

——ああ、そうか。」

辻町は、息を入れると、石に腰をずらして、ハタと軽く膝をたたいた。

三

その時、外套がいとうの袖にコトンと動いた、石の上の提灯ちようちんの面つらは、またおかしい。いや、おかしくない、大空の雲を淡く透すかして蒼白あおしろい。

「……さて、これだが、手向けるとか、供えるとか、お米坊のいう——誰かさんは——」
「ええ、そうなの。」

と、小菊と坊さん花をちよつと囲つて、お米は静しずかに頷うなずいた。

「その嬰あかんぼ児ごが、串じょうだん戯ごにも、心中の仕損しじみいなどという。——いずれ、あの、いけずな御母堂から、いつかその前後の事を聞かされて、それで知っているんだね。

不思議な、怪しい、縁だなあ。——花あかりに、消えて行った可哀相な人の墓はいかにも、この燈籠寺にあるんだよ。

若氣のいたり。……」

辻町は、額をおさえて、提灯に俯向いて、

「何と思つたか、東京へ——出発間際、人目を忍んで……というと悪く色気があります。

何、ここそと、鼠あるきに、行燈形のあんどんなりのちいさきりこの、就中、安価なかんずくなのを一枚細腕ひとつ

で引いて、梯子段はしごだんの片暗がりかたぐまりを忍ぶように、この磴いしだんを隅すみの方から上あがつて来た。胸も、息

も、どきどきしながら。

ゆかただか、羅うすものだか、女郎花おみなえし、桔梗ききょう、萩はぎ、それとも薄すすきか、淡彩色うすざいしきの燈籠より、美

しく寂しずくしからう、白露しゆくに雫しゆくをしそうな、その女ひとの姿すがたに供たもてる気です。

中段さ、ちようど今居る。

しかるに、どうだい。お米坊こめぼうは洒落しやれにも私わたしを、薄情はくじやうだというけれど、人間の薄情はくじやうより三

十年の月日は情がない。この提灯ていとうでいうのじゃないが、燈台下暗あんしで、とぼんとして気がつかつかなかつた。申訳まことより、面目めんぼくがないくらいだ。

——すまして饒舌しやべつて可いいか知らん、その時は、このもみじが、青葉あおはで真黒まっくろだった下

へ来て、上へ墓地ぼりを見ると、向うの峯たかねをぼつと、霧きりにして、木曾きよのははき木きだね、ここじや、見えない。が、有名な高燈籠たかとうろうが榎えのきの梢すえに灯ともれている……葉はと葉はをくぐつて、燈ひの影かげが

露を誘つて、ちらちらと樹を伝うのが、長くかかつて、幻の藤の総を、すつと靡なびかしたように仰がれる。絵の模様は見えないが、まるで、その高燈籠の宙の袖を、その人の姿のよ
うに思つて、うっかりとして立つた。

——ああ、呆れた——

目の前に、白いものと思つたつけ、山門を真ま下さりに、藍あゐがかつた浴衣に、昼夜帯の婦
人が、

——身投げに逢いに来ましたね——

言う事も言う事さ、誰だと思ひます。御母堂さ。それなら、言いそうな事だろう。いき
なり、がんと撲くらわされたから、おじさんの小僧、目をまるくして胆きもを潰つぶした。そうだろう、
当の御親類の墓地へ、といつては、ついぞ、つけとどけ、盆のお義理なんぞに出向いた事
のない奴やつが、」

辻町は提灯を押えながら、

「酒買とまじい狸とまじが途惑とまじをしたように、燈籠をぶら下げて立っているんだ。

いう事が捷すば早いよ、お京さん、そう、のつけにやられたんじゃ、事実、親類へ供えに来
たものにした処で、そうとはいえない。

——初路さんのお墓は——

いかにも、若い、優しい、が、何だか、弱々とした、身を投げた女の名だけは、いつか聞いていた。

——お墓の場所は知っていますか——

知るもんですか。お京さんが、崖で夜露に^{すべ}にる処へ、石ころ道が^{きつた}切立てで危いから、そんなにとぼついているんじや怪我をする。お寺へ預けて、昼間あらためて、お参りを、そうなさい、という。こつちはだね。日中の^{ひなか}このこ出られますか。何、志はそれで済むからこの石の上へ置いたなり帰ろうと、降参に及ぶとね、犬猫が踏んでも、きれいな^{しやうり}お精霊が身震いをするだろう。——とにかく、お寺まで、と云つて、お京さん、今度は^{かたづ}片棲をきりりと^{はしよ}端折つた。

こつちもその要心から、わざと夜になつて出掛けたのに、今頃まで、何をしていたろう。(遊んでいた。世の中の^{うる}煩ささがなくて寺は涼しい。裏縁に引いた山清水に……^{すいか}西瓜は^{おご}驕りだ、和尚さん、小僧には^{ないしよ}内証らしく冷して置いた、^{あじさい}紫陽花の影の映る、^{ところてん}青い心太をつるつる突出して、^{からし}芥子を利かして、冷い涙を流しながら、見た処三百ばかりの墓燈籠と、草葉の影に九十九ばかり、お精霊の幻を見て涼んでいた、その中に初路さんの姿も。)

と、お京さん、好すきなお転婆をいって、山門を入いつた勢いきだからね。……その勢いきだから……向
つた本堂の横式台、あの高い処ところに、晚出おそでの参詣さんげいを待まちつて、お納所なっしょが、盆礼、お返しお返しの
しるしと、紅白の麻糸を三宝に積たんで、小机を控ひっこえた前まへへ。どうです、私が引込ひっこむもんだ
から、お京さん、引取きりつた切籠燈きりこをツイと出すと、

——この春、身を投なげた、お嬢お嬢さんに。……心中を仕損しつた、この人の、こころざ
し——

私は門まで遁出にげだしたよ。あとをカタカタと追おつて返かえして、

——それ、紅い糸を持もつて来た。縁結えんむすびに——白しろいのが好よかったかしら、……あい
ては幻……

と頬ほをかすられて、私はこの中段まで転まげ落ちた。ちと大袈裟おおげさだがね、遠くの暗い海の
上で、稲妻いなづまがしていたよ。その夜、途中からえらい降りだ。……

……
……

辻町は夕立を懐おもうごとく、しばらく息を沈めたが、やがて、ちよつと語調をかえて云いつ
た。

「お米坊、そんな、こんな、お母さんに聞いていたのかね。」

「ええ、お嫁に行つてから、あと……」

「そうだろうな、あの氣象でも、極りどころは整然としている。嫁入前の若い娘に、余り聞かせる事じやないから。」

——さて、問題の提灯だ。成程、その人に、切籠燈のかわりに供えると、思ったのはもつともだ。が、そんな、実は、しおらしいとか、心入れ、とかいう奇特なんじやなかつたよ。懺悔をするがね、実は我ながら、とぼけていて、ひとりでおかしいくらいなんだよ。月夜に提灯が贅沢なら、真昼間ぶらで提げたのは、何だろう、余程半間さ。

というのがね、先刻お前さんは、連にはぐれた観光団が、鼻の下を伸ばして、うっかり見物している間抜けに附合う気で、黙つてついてくれたけれど、来がけに坂下の小路中で、あの提灯屋の前へ、私がぼんやり突立つたろう。

場所も方角も、まるで違うけれども、むかし小学校の時分、学校近所の……あすこは大川近の窪地だが、寺があつて、その門前に、店の暗い提灯屋があつた。髯のある親仁が、紺の筒袖を、斑々の胡粉だらけ。腰衣のような幅広の前掛したのが、泥絵具だらけ、青や、紅や、そのまま転がったら、楽書の獅子になりそうで、牡丹をこつてりと刷毛で

彩^{えいど}る。緋^ひも桃色^{ももいろ}に颯^{さつ}と流^{なが}して、ぼかす手際^{てぎわ}が鮮^{あざやか}彩^{いろ}です。それから鯉^{こい}の滝^{たき}登^{のぼ}り。八橋^{やっしやう}一面^{いちめん}の杜^{かきつばた}若^{わか}は、風呂屋^{ふうりや}へ進上^{しんじやう}の祝^{いわい}だろう。そんな比羅^{ひら}繪^えを、のしかかつて描^かいているのが、嬉^{うれ}しくて、面白^{おもしろ}くつて、絵具^{えぐ}を解^とき溜^ためた大摺鉢^{おほすりばち}へ、鞠子^{まりこ}の宿^{しゆく}じやないけれど、薯蕷^{とろろ}汁^{じゆ}となつて溶^とれ込むように……学校の帰途^{かへり}にはその軒下^{のきげ}へ、いつまでも立^たつて見ていた事を思^{おも}出した。時雨^{みぞれ}も霰^{みぞれ}も知^しっている。夏^{なつ}は学校^{がく}が休^{やす}みです。桜^{さくら}の春^{はる}、また雪^{ゆき}の時^{とき}なんぞは、その緋牡丹^{ひぼたん}の燃^もえた事^{こと}、冴^さえた事^{こと}、葉^はにも苔^{こけ}にも、パツパツと惜^{おしげ}気^げなく金銀^{きんぎん}の箔^{はく}を使うのが、御殿^{ごてん}の廊下^{らうか}へ日^ひの射^さしたように輝^{かがや}いた。そうした時は、家^{うち}へ帰^{かへ}る途中^{ちゆうちゆう}の、大川^{おほがは}の橋^{はし}に、綺^{きら}麗^らな牡丹^{ぼたん}が咲^さいたつけ。

先刻^{さつき}のあの提灯屋^{ていとうや}は、絵比羅^{えひら}も何^{なに}にも描^かいてはいない。番傘^{ばんかさ}の白^{しろ}いのを日向^{ひなた}へ並^{なら}べていたんだが、つい、その昔^{むかし}を思^{おも}出して、あんまり店^{みせ}を覗^{のぞ}いたので、ただじゃ出^でて来^きにくくなつたもんだから、観光^{くわんかう}団^{だん}お買^かひ上げさ。

——ご紋^{ごもん}は——

——牡丹^{ぼたん}——

何^{なに}、描^かかせては手間^{てま}がとれる……第一^{だい}実用^{じつよう}むきの気^きといつては、いささかもなかつたからね。これは、傘^{かさ}でもよかつたよ。パツと拡^{ひろ}げて、菊^{きく}を持^もつたお米^{こめ}さんに、背^{うしろ}後^ごから差^さ掛^か

けて登れば可^よかつた。」

「どうぞ。……女万歳の広告に。」

「仰せのとおり。——いや、串^{じょうだん}戯^ははよして。いまの並べた傘の小間^{すきま}隙間へ、柳を透いて日のさすのが、銀の色紙^{しきし}を拵^しげたような処へ、お前さんのその花についていたろう、蝶が二つ、あの店へ翔^{たちこ}込んで、傘の上へ舞つたのが、雪の牡丹へ、ちらちらと箔^{はく}が散浮く……

そのままだに見えたと思つた時も——箔——すぐこの寺に墓のある——同町内に、ぐつしよりと濡れた姿を儂^{はかな}く引取つた——箔屋——にも気がつかなくつた。薄情とは言われまいが、世帯の苦勞に、朝夕は、細く刻んでも、日は遠い。年月が余^{へだた}り隔ると、目^め前^{のまえ}の菊日和も、遠い花の霞になつて、夢の朧^{わぼろ}が消えて行く。

が、あらためて、澄まない気がする。御母堂の奥津城を展じたあとで。……ずっと離れているといいんだがな。近いと、どうも、この年でも極^{きま}りが悪い。きつと冷かすぜ、石塔の下から、クツクツ、カラカラとまず笑う。」

「こわい、おじさん。お母^{つか}さんだがいいいけれど。……私がついていきますから、冷かしはしませんから、よく、お拝みなさいませよね。」

——（糸塚）さん。」

「糸塚……初路さんか。糸塚は姓なのかね。」

「いいえ、あら、そう……おじさんは、ご存じないわね。」

——糸塚さん、糸巻塚ともいうんですって。

この谷を一つ隔てた、向うの山の中に、鬼子母神様のお寺がありましたよ。」

「ああ、柘榴寺——真成寺。」

「ちよつとごめんなさい。私も端の方へ、少し休んで。……いいえ、構うもんですか。落葉といつても錦にしきのようで、勿体ないほどですわ。あの柘榴の花の散った中へ、鬼子母神様の雲だといって、草履を脱いで坐つたのも、つい近頃のようなですもの。お母さんにつれられて。白い雲、青い雲、紫の雲は何様でしょう。鬼子母神様は紅あかい雲のように思われますね。」

墓所は直近じきいののに、面影を遥はるかに偲しのんで、母親を想うか、お米は恍惚うっとりして云つた。

——聞くとともに、辻町は、その壮年を三四年、相州逗子ずしに過あごした時、新婚かの渠かれの妻女の、病厄のためにまさに絶えなるとした生命を、医療もそれよ。まさしく観世音の大慈ひとこころの利験りやくに生きたことを忘れない。南海靈山の岩殿寺、奥の御堂みじうの裏山に、一ひとこころ 処ところ 咲満

ちて、春たけなわな白びやっこう光くわうに、奇くしき薰かおりの漲みなぎった紫すみれの堇なづなの中に、白しろい山やま兔うさぎの飛とぶのを視みつつ、病中びやうちゆうの人ひとを念ねんじたのを、この時ときままざざままざと、目め前ぜんの雲うみに視みて、輝きらく靈れい巖げんの台たいに對たいし、さしううつむくまで、心しん衷ちゆうに、恭こう礼らい默もく拜ぱいしたのである。――

お米の横顔こうがんさえ、※ろうたけて、

「柘榴寺せきじゆ、ね、おじさん、あすこの寺内じないに、初はつ代だい元げん祖そ、友とも禪ぜんの墓はかがありましよう。一いつ頃ころは訪とう人ひとどころか、苔こけの下したに土つちも枯かわれ、水みづも涸かわいていたんですが、近ちか年ねん他た国こくの人ひとたちが方かた々々から尋たずねて来きて、世よ評へいがたいもんんですから、記き念ねん碑ひがしんしく建たちましてね、名な所じよのようになりました。それでね、ここのお寺でも、新しん規ぎに、初はつ路ろさんの、やっぱり記念ねん碑ひを建てる事じになつたんです。」

「ははあ、和尚じやうさん、娑しや婆ぱ気けだな、人ひと寄よせに、黒くろ梓すで……と身みを投なげた人ひとだから、薄うす彩さい色しき水みづ絵え具ぐの立た看かん板ばん。」

「黙もくつて。……いいえ、お上じやう人にんよりか、檀だん家かの有あ志し、県けんの觀くわん光くわう会かいの表へう向きやうきの仕し事じなんんです。お寺では地ぢ所じよを貸かすんです。」

「葬むすぶつた土つちとは別わかなんだね。」

「ええ、それで、糸塚、糸巻塚、どっちにしようかっていつてるところ。」

「どっちにしろ、友禪の（染）に対する（糸）なんだろう。」

「そんな、ただ思いつき、趣向ですか、そんなんじやありません。あの方、はんけちの工場へ通つて、縫取をしていらしつてき、それが原因もとで、あんな事になったんですもの。糸も紅糸べにいとからですわ。」

「糸も紅糸……はんけちの工場へ通つて、縫取をして、それが原因もと?……」

「まあ、何にも、ご存じない。」

「怪我にも心中だなどという、そういつちや、しかし済まないけれども、何にも知らない。おなじ写真を並んで取つても、大勢の中だと、いつとなく、生別れ、死別れ、年が経たつと、それつきりになる事もあるからね。」

辻町は向直つていったのである。

「蟹は甲らに似せて穴を掘る……も可訝おかしいかな。おなじ穴の狸……飛んでもない。一升入ひせしの瓢は一升だけ、何しろ、当推量も左前だ。誰もお極きまりの貧ひのくるしみからだと思つていたよ。」

また、事実そうであつた。

「まあ、そうですね、いうのもお可哀相。あの方、それは、おくらしに賃仕事をなすつたでしょう。けれど、もと、千五百石のお邸やしきの女じょうろう※さん。」

「おお、ざつとお姫様だ。ああ、惜しい事をした。あの晩一緒に死んでおけば、今頃はうまれかわって、小いろの一つも持った果報な男になつたろう。……糸も、紅糸は聞いても床しい。」

「それどころじゃありません。その糸から起つた事です。千五百石の女※ですが、初路さん、お妾めかけばら腹はらだつたんですつて。それでも一粒種、いい月日もとの下もとに、生れなすつたんですけれど、廃藩以来、ほどなく、お邸は退転、御両親も皆あの世。お部屋方の遠縁へ引取られなさいましたのが、いま、お話のありました箔屋なのです。時節がら、箔屋さんも暮しが安易ちやくでないために、工場こうば通いをなさいました。お邸育ちのお慰みから、縮ちりめん細細工もお上手だし、お針は利きます。すぐ第一等の女工さんでごく上等のものばかり、はんけちと云つて、薄色もありましようが、おもに白絹へ、蝶花を綺麗ししゅうに刺繡ししゅうをするんですが、いい品は、国産の誉れの一つで、内地より、外国へ高級品で出たんですつて。」

「なるほど。」

四

あれあれ見たか

あれ見たか

………

「あれあれ見たか、あれ見たか、二つ蜻蛉とんぼが草の葉に、かやつり草に宿かりて……その唄を、工場で唱いましたつてき。唄が初路さんを殺したんです。

細い、かやつり草を、青く縁へとつて、その片端、はんけちの雪のような地じへ赤蜻蛉を二つ。」

お米の二つ折る指がしなつて、内端うちばに襟をおさえたのである。

「一ツずつ、蜻蛉が別ならよかつたんでしようし、外の人の考かんがえ案で、あの方、ただ刺繍だけなら、何でもなかつたと言うんです。どの道、うつくしいのと、仕事の上手なのに、嫉ねたみ猜そねみから起つた事です。何につけ、かにつけ、ゆがみ曲りに難癖をつけないではおきません。処を凶案まで、あの方がなさいました。何かから思いつきなすつたんだか。——その赤蜻蛉の刺繍が、大層な評判だし、分けて輸出さききの西洋の気受けが、それは、凄すいい勢おい

で、どしどし註文が来ました処から、外国まで、恥を曝さらすんだって、羽をみんな、手足にして、紅いのを縮緬はやのように唄はやい囃はやして、身肌を見せたと、騒さわぐんでしよう。」
(巻初に記して一 粲いっさんに供した俗謡には、二三行、

.....

.....

脱落があるらしい、お米が口誦くしやうを憚はばかったからである。)

「いやですわね、おじさん、蝶々や、蜻蛉は、あれは衣服きものを着ているでしょうか。

——人目しのぶと思えども

羽はうすもの隠されぬ——

それも一つならまだしもだけれど、一つの尾に一つが続いて、ずっと、あの、羽を八つ、静かに銀糸で縫ったんです、寝ていやしません、飛んでいるんですわね。ええ、それをですわ、

——世間、いなずま目が光る——

——恥を知らぬか、恥じないか——と皆みんなでわあわあ、さも初路さんが、そんな姿絵を、紅い毛、碧あおい目にまで、露呈あらかわに見せて、お宝を儲けたように、唱い立てられて見た日には、

内気な、優しい、上品な、着ものの上から触られても、毒蛇の牙形が膚に沁みる……雪に咲いた、白玉椿のお人柄、耳たぶの赤くなる、もうそれが、碎けるのです、散るのです。

遺書にも、あつたそうです。——ああ、恥かしいと思つたばかりに——」

「察しられる。思いやられる。お前さんも聞いていようか。むかし、正しい武家の女性たちは、拷問の筈、火水の責にも、断じて口を開かない時、ただ、衣を褌う、肌着を剥ぐ、裸体にするというとともに、直ちに罪に落ちたというんだ。——そこへ掛けると

……」

辻町は、かくも心弱い人のために、西班牙セビイラの煙草工場のお転婆を羨んだ。

同時に、お米の母を思つた。お京がもしその場に処したら、相手の工女の顔に象棋盤の目を切るかわりに、酔ながら心太を打ちまけたろう。

「そこへ掛けると平民の子はね。」

辻町は、うっかりいつた。

「だって、平民だって、人の前で。」

「いいえ。」

「ええ、どうせ私は平民の子ですから。」

辻町は、その乳のわきの、青い若菜を、ふと思つて、覚えぬ肩を縮めたのである。

「あやまった。いや、しかし、千五百石の女※、昔ものがたり以上に、あわれにはかない。そうして清らかだ。」

「中将姫のようでしたつて、白羽二重の上へすべると、あの方、白い指が消えました。露が光るように、針の尖をさき伝つて、薄い胸から紅い糸が揺れて染まつて、またかが膝つて、銀の糸がきらきらと、何枚か、幾つの蜻蛉が、すいすいと浮いて写る。——（私がそば傍に見ていました）つて、鼻ひしやげのその頃の工女が、茄子なすの古漬のような口を開けて、老い年で話すんです。その女だつて、その臭い口で声を張つて唱つたんだと思うと、聞いていて、口く惜しい、睨にらんでやりたいようですわ。——でも自害をなさいました、後一年ばかり、一ひと時はこの土地で湯屋でも道端でも唄つて、お気の弱いのをたつとむまでも、初路さんの刺繡を恥かしい事にいたしましたとき。

——あれあれ見たか、あれ見たか——、銀の羽がそのまま手足で、二つ蜻蛉が何とかですもの。」

「一体また二つの蜻蛉がなぜ変だろう。見聞みききが狭い、知らないんだよ。土地の人は——そういう私だつて、近頃まで、つい気がつかずに居たんだがね。」

手紙のついでで知っておいでだろうが、私の住んでいる処と、京橋の築地までは、そうだね、ここから、ずっと見て、向うの海まではあるだろう。今度、当地へ来がけに、齒が疼んで、馴染の齒科医へ行つたとお思い。その築地は、というと、用たしで、齒科医は大廻りに赤坂なんだよ。途中、四谷新宿へ突抜けの麴町の大通りから三宅坂、日比谷……銀座へ出る……歌舞伎座の前を真直に、目的の明石町までと饒舌つてもいい加減の間、町充滿、屋根一面、上下、左右、縦も横も、微紅い光る雨に、花吹雪を浮かせたように、羽が透き、身が染つて、数限りもない赤蜻蛉の、大流れを漲らして飛ぶのが、行違つたり、正に舞乱れたりするんじゃない、上へ斜、下へ斜、右へ斜、左へ斜といった形で、おなじ方向を真北へさして、見当は浅草、千住、それから先はどこまでだか、ほとんど想像にも及びません。——明石町は昼の不知火、隅田川の水の影が映つたよ。

で、急いで明石町から引返して、赤坂の方へ向うと、また、おなじように飛んでいる群れて行く。齒科医で、椅子に掛けた。窓の外を、この時は、幾分か、その数はまばらに見えたが、それでも、千や二千じゃない、二階の窓をすれすれの処に向う家の廂見当、ちやうど電信、電話線の高さを飛ぶ。それより、高くもない。ずっと低くもない。どれも、おなじくらいな空を通るんだがね、計り知られないその大群は、層を厚く、密度を濃かに

したのじやなくつて、薄く透通る。その一つ一つの薄い羽のようにさ。

何の事はない、見た処、東京の低い空を、淡紅一面の紗を張つて、銀の霞に包んだようだ。聳立つた、洋館、高い林、森なぞは、さながら、夕日の紅を巻いた白浪の上の巖の島と云つた態だ。

つい口へ出た。（蜻蛉が大層飛んでいますね。）齒医師が（はあ、早朝からですよ。）と云つたがね。その時は四時過ぎです。

帰途に、赤坂見附で、同じことを、運転手に云うと、（今は少くなりました。こんなもんじやありません。今朝六時頃、この見附を、客人で通りました時は、上下、左右すれ違ふとサワサワと音がします。青空、青山、正面の雪の富士山の雲の下まで裾野を蔽うといひます紫雲英のように、いつぱいです。赤蜻蛉に乗せられて、車が浮いて困つてしまいました。こんな経験ははじめてです。）と更めて吃驚したように言うんだね。私も、その日ほど夥しいのは始めてだったけれど、赤蜻蛉の群の一日都会に漲るのは、秋、おなじ頃ほとんど毎年と云つてもいい。子供のうちから大好きなんだけれど、これに気のついたのは、——うっかりじやないか——この八九年以来なんだが、月はかわりません。きつと十月、中の十日から二十日の間、三年つづいて十七日というのを、手帳につけて覚えていま

す。季節、天気というものは、そんなに模様の変らないものと見えて、いつの年も秋の長雨、しけつづき、また大あらしのあつたあくるあさ翌朝、からりと、嘘のように青空になると、待つてたように、しずめたり浮いたり、風に、すらすらすらすと、薄い紅い霧あかをほぐして通る。

——この辺は、どうだろう。」

「え。」

話にききとれていたせいではあるまい、お米の顔は緋葉もみじの蔭にほんのりしていた。

「……もう晩おそいんでしょう、今日は一つも見えませぬわ。前の月の命日に参詣おまいりをしました時、山門を出て……あら、このいい日和にむら雨かと思いました。赤蜻蛉の羽がまるで銀の雨の降るように見えたんです。」

「一ツずつかね。」

「ひとつずつ?」

「二ツずつではなかつたかい。」

「さあ、それはどうですか、ちよつと私気がつきません。」

「気がつくまい、そうだろう。それを言いたかつたんだ、いまの蜻蛉の群の話は。それが

ね、残らず、二つだよ、比翼なんだよ。その刺繡ししゅうの姿と、おなじに、これを見て土地の人は、初路さんを殺したように、どんな唄を唱うだろう。

みだらだの、風儀を乱すの、恥を曝さらすのといつて、どうする気だろう。浪で洗えますか、火で焼けますか、地震だつて壊せやしない。天を蔽おほい地に漲みなぎる、といった処で、颯風はやてがあれば消えるだろう。儂はかないものではあるけれども——ああ、その儂さを一人で身に受けたのは初路さんだね。」

「ええ、ですから、ですから、おじさん、そのお慰めかたがた……今では時世がかわりました。供養のために、初路さんの手技てわざを称ほめ替たえようと、それで、「糸塚」という記念の碑を。」

「……………」

「もう、出来かかっているんです。図取は新聞にも出ていました。台石の上へ、見事な白い石で大きな糸杵を据えるんです。刻んだ糸を巻いて、丹にで染めるんだっていうんですわ。」

「そこで、「友禅の碑」と、対つするのか。しかし、いや、とにかく、悪い事ではない。場所は、位置は。」

「さあ、行つて見ましょう。半分うえ出来ているようです。門を入れて、直きの場所です。」

辻町は、あの、盂蘭盆の切籠燈きりこに対する、寺の会釈を伝えて、お京が渠かれに戯れた紅糸べにいとを思つて、ものに手繰られるように、提灯とともにふらりと立つた。

五

「おぼけの……蜻蛉？……おじさん。」

「何、そんなものの居よう筈はずはない。」

とさも落着いたらしく、声を沈めた。その癖、たつた今、思わず、「あ！」といったのは誰だろう。

いま辻町は、蒼然そうぜんとして苔蒸こけむした一基の石碑を片手で抱いて——いや、抱くなどというのは憚はばかろう——霜より冷くつても、千五百石の女じょうろう※の、石の軀むくろともいうべきものに手を添えているのである。ただし、その上に、沈んだ藤色のお米の羽織が袖をすんなりと墓

のなりにかかった、が、織だか、地紋だか、影絵のように細い柳の葉に、菊らしいのを薄
色に染出したのが、白い山土に敷乱れた、枯草の中に咲残った、一叢ひとむらの嫁菜の花と、入
交りまぜに、空を蔽うた雑樹を洩もれる日光に、幻の影を籠こめた、墓はさながら、梢こずえを落した、
うらがなしい綺麗な錦紗きんしゃの燈籠の、うつむき伏した風情がある。

ここは、切立きつたてというほどではないが、巖いわ組みの径みちが峻けわしく、砕いた薬研やげんの底を上る、涸か
れた滝の痕あとに似て、草土手の小高い処で、纍る々と墓が並び、傾き、また倒れたのがある。
上り切った卵塔の一劃、高い処に、裏山の峯を抽ぬいて繁ったのが、例の高燈籠の大榎で、
巖を縫わだかまって蟠わだかまった根に寄って、先祖代々とともに、お米のお母つかさんが、ぱつと目を開きそ
うに眠っている。そこも蔭で、薄暗い。

それ、持参の昼提灯、土の下からさぞ、半間だと罵倒ばとうしようが、白く据すわって、ぼつと包
んだ線香の煙が靡なびいて、裸蠟燭ろうそくの灯が、静寂な風に、ちらちらする。

榎くぐを潜くぐった彼方かなたの崖は、すぐに、大傾斜の窪地になって、山の裾すそまで、寺の裏庭を取り
まわして一谷ひとたに一面の卵塔である。

初路の墓は、お京のと相向って、やや斜下、左の草土手の処にあった。

見たまえ——お米が外套がいのとうを折畳みにして袖に取って、背後うしろに立添った、前踞まえごこみに、

辻町は手をその石碑にかけた羽織の、裏の媚かしい中へ、さし入れた。手首に冴えて淡藍が映える。片手には、頑丈な、錆の出た、木鋏を構えている。

この大剪刀が、もし空の樹の枝へでも引掛つていたのだと、うつかり手にはしなかつたろう。盃蘭盆の夜が更けて、燈籠が消えた時のように、羽織で包んだ初路の墓は、あわれにうつくしく、且つあたりを籠めて、陰々として、鬼気が籠るのであったから。

鋏は落ちていた。これは、寺男の爺やまじりに、三人の日傭取が、ものに驚き、泡を食つて、遁出すのに、投出したものであった。

その次第はこうである。

はじめ二人は、磴から、山門を入ると、広い山内、鐘楼なし。松を控えた墓地の入口の、鎖さない木戸に近く、八分出来という石の塚を視た。台石に特に意匠はない、つい通りの巖組一丈余りの上に、詠えの枿を置いた。が、あの、くるくると糸を廻す棒は見えぬ。くり抜いた跡はあるから、これには何か考案があるらしい。お米もそれはまだ知らなかつた。枿の四つの柄は、その半面に対しても幸に鼎に似ない。鼎に似ると、烹るも烙くも、いづれ織楚い人のために見える目も忍びないであろう処を、あたかも好、玉を捧ぐる白珊瑚の滑かなる枝に見えた。

「かえりに、ゆつくり拝見しよう。」

その母親の展墓である。自分からは急がすのをためらった案内者が、

「道が悪いんですから、気をつけてね。」

わあ、わつ、わつ、わつ、おう、ふうと、鼻呼吸を吹いた面を並べ、手を挙げ、胸を敲き、拳を振りなど、なだれを打ち、足ただらを踏んで、一時に四人、摺違いに木戸口へ、茶色になつて湧いて出た。

その声も跫音も、響くと、もろともに、落ちかかったばかりである。

不意に打つかりそうなのを、軽く身を抜いて路を避けた、お米の顔に、鼻をまともに突向けた、先頭第一番の爺が、面も、脛も、一縮みの皺の中から、ニンガリと変に笑つたと
思うと、

「出ただええ、幽霊だあ。」

幽霊。

「おツさん、蛇、蝮？」

お米は——幽霊と聞いたのに——ちよつと眉を顰めて、蛇、蝮を憂慮つた。

「そんげえなもんじゃねえだア。」

いかにも、そんげえなものには怯えまい、面魂、印半纏しるしばんでんも交つて、布子のどんつく、
 半股引はんももひき、空脛からすねが入乱れ、屈くつきよう竟な日傭取が、早く、糸塚の前を摺抜けて、松の下に、
 ごしやごしやとかたまつた中から、寺爺やの白い眉の、びくびくと動くが見えて、

「蜻蛉だあ。」

「幽霊蜻蛉ですだアい。」

と、冬の麦稈帽むぎわらぼうを被かぶつた、若いのが声を掛けた。

「蜻蛉なら、幽霊だつて。」

お米は、莞爾にっこりして坂上りに、衣紋えもんのやや乱れた、浅黄を雪に透く胸を、身繕いもせず、
 そのまま、見返りもしないで木戸を入つた。

巖いわは鋭い。踏み上る径みちは嶮けわしい。が、お米の双の爪さきは、白い蝶々に、おじさんを載おせ
 て、高く導く。

「何だい、今のは、あれは。」

「久助つて、寺爺やです。卵塔場で働いていて、休みのお茶のついでに、私をからかつた
 んでしょう。子供だと思つている。おじさんがいらつしやるのに、見さかいがない。馬鹿
 だよ。」

「若いお前さんと、一緒にからかわれたのは嬉しいがね、威かすにしても、寺で幽霊をいう奴があるものか。それも蜻蛉の幽霊。」

「蛇や、蝮でさえなければ、蜥蜴とかけが化けたつて、そんなに可恐こわいもんですか。」

「居るかい。」

「時々。」

「居るだろうな。」

「でも、この時節。」

「よし、私だつて驚かない。しかし、何だろう、ああ、そうか。おはぐろとんぼ、黒とんぼ。また、何とかいったつけ。漆のような真まつくろ黒な羽のひらひらする、織ほそく青い、たしか河原蜻蛉とも云つたと思うが、あの事じやないかね。」

「黒いのは精霊蜻蛉ともいいますわ。幽霊だなんのつて、あの爺じじい。」
その時であつた。

「ああ。」

と、お米が声を立てると、

「酷ひどいこと、墓はかを。」

といった。声とともに、着た羽織をすつと脱いだ、が、紐をどう解いたか、袖をどう、手の菊へ通したか、それは知らない。花野を颯と靡かした、一筋の風が藤色に通るように、早く、その墓を包んだ。

向う傾けに草へ倒して、ぐるぐる巻というよりは、がんじ擲みに、ひしと荒縄の汚いのを、無残にも。

「初路さんを、——初路さんを。」

これが女※の碑だったのである。

「莫塵にも、蓆にも包まないで、まるで裸にして。」

と気色ばみつつ、且つ恥じたように耳朶を紅くした。

いうまじき事かも知れぬが、辻町の目にも咄嗟に印したのは同じである。台石から取つて覆えした、持扱いの荒くれた爪摺れであろう、青々と苔の蒸したのが、ところどころられて、日の隈幽に、石肌の浮いた影を膨らませ、影をまた凹ませて、残酷に擲めた、さながら白身の窶れた女を、反接緊縛したに異ならぬ。

推察に難くない。いずれかの都合で、新しい糸塚のために、ここの位置を動かして持運ぼうとしたらしい。

が、心ない仕事をどうする。——お米の羽織に、そうして、墓の姿を隠して好かつた。花やかともいえよう、ものに激した挙動ふるまいの、このしつとりした女房の人柄に似ない捷いすばや仕種しぐさの思掛けなさを、辻町は怪しまず、さもなりそうな事と思つたのは、お京の娘だからであつた。こんな場に出逢つては、きつとおなじはからいをするに疑いない。そのかわり、娘と違い、落着いたもので、澄まして羽織を脱ぎ、背負揚しよいあげを棄て、悠然と帯いわおを巖いわに解いて、あらわな長襦袢ながじゆばんばかりになつて、小袖ぐるみ墓に着せたに違いない。

何、夏なら、炎天なら何とする?……と。そういう皮肉な読者おかたには弱る、が、言わねば卑怯ひきようらしい、裸体はだかになります、しからずんば、辻町が裸体にされよう。

——その墓へはまず詣でた——

ひつかえ
引返して来たのであつた。

辻町の何よりも早くここでしよう心は、立たちどころ処ところに繩を切つて棄てる事であつた。瞬時といえども、人目に曝さらすに忍びない。行やるとなれば手伝おう、お米の手を借りて解きほどきなどするのにも、二人の目さえ当てかねる。

さしあたり、ことわりもしないで、他の労業を無にするという遠慮だが、その申訳と、渠等かれらを納得させる手段は、酒と餅で、そんなに煩わしい事はない。手で招いても洗面しわの皺しわ

は伸びよう。また厨裡で心太を突くような跳梁権を獲得していた、檀越夫人の嫡女がここに居るのである。

栗柿を剥く、庖丁、小刀、そんなものを借りるのに手間ひまはかからない。

大剪刀が、あたかも蝙蝠の骨のように飛んでいた。

取つて構えて、ちと勝手は悪い。が、縄目を見る目に忍びないから、衣を掛けたこのまま、留南奇を燻く、絵で見た伏籠を念じながら、もろ手を、ずかと袖裏へ。驚破、ほんのりと、暖い。芬と薫つた、石の肌の軟かさ。

思わず、

「あ。」

と声を立てたのであった。

「——おばけの蜻蛉、おじさん。」

「——何そんなものの居よう筈はない。」

胸傍の小さな痣、この青い藓、そのお米の乳のあたりへ鋏が響きそうだったからである。辻町は一礼し、墓に向つて、屹といった。

「お嬢さん、私の仕業が悪かったら、手を、怪我をおさせなさい。」

鉢は爽さわやかな音を立てた、ちちろも声せず、松風を切ったのである。

「やあ、塗師ぬしや屋様、——ご新姐しんぞ。」

木戸から、寺男の皺しわづら面が、墓地下で口をあけて、もう喚わめき、冷めし草履の馴なれたもので、これは礮こうかくたる徑みちは踏まない。草土手を踏んで横ざまに、傍そばへ来た。

続いて日傭ひようとり取が、おなじく木戸口へ、肩を組合つて低く出た。

「ごめんなせえましよ、お客様。……ご機嫌よくこうやってござらっしゃる処を見ると、間違まちがえごともなかったの、何も、別条はなかっただね。」

「ところが、おっさん、少々別条があるんですよ。きみたちの仕事を、ちよつと無駄むだにしました。一杯買おう、これです、ぶつぶつに繩きつぽらを切き払はらった。」

「はい、これは、はあ、いい事をさつせえて下さりました。」

「何だか、あべこべのような挨拶あいさつだな。」

「いんね、全ぜんくいい事をなさせえました。」

「いい事をなさいましたじやないわ、おいたわしいじやないの、女おんな※さんがさ。」

「ご新姐、それがね、いや、この、からげ繩、畜生。」

そこで、かが 踞んで、毛虫を踏潰ふみつぶしたような爪さきへ近く、切れて落ちた、むすびめの節立った荒縄を手繰棄てに背後うしろへ芻出はねだしながら、きよろきよろと樹の空を見廻した。

妙なもので、下木戸の日傭取たちも、申合せたように、揃って、かが 踞んで、空を見る目が、皆動く。

「いい塩梅あんばいに、幽霊蜻蛉、消えただかな。」

「一体何だね、それは。」

「もの、それがでござりますよ、お客様、この、はい、石塔を動かすにつきましただ。」

「いずれ、あの糸塚とかいうのについての事だろうが、何かね、掘返してお骨でも。」

「いや、それはなりません。記念碑発掘押っぱだての、帽子、靴、洋服、袴はかま、髻ひげの生えた、ご連中さ、そのつもりであつたれど、寺の和尚様、承知さっしやりましたねえだ。ものこれ、三十年経たつたところいえ、若い女じょうろが埋うまつてるだ。それに、久しい無縁墓むだで、ことわりいう檀家もなしの、立合たつてくれる人の見分ひもないで、と一論判ひあつた上で、土には触らねえ事ことになつたでがす。」

「そうあるべき処ところだよ。」

「ところで、はい、あのさ、石彫いしほりの大でえ糸柁いとの上へ、がっしりと、立派りつぱなお堂を据えて

戸をあけたてしますだね、その中へこの……」

お米は着流しのお太鼓で、まことに優に立っている。

「おお、成仏をさっしやるずら、しおらしい、嫁菜の花のお羽織きて、霧は紫のようだ、しなしなとしてや。」

と、苔こけの生えたような手で撫なでた。

「ああ、擦くすくすつたい。」

「何でがすい。」

と、何も知らず、久助は墓の羽織を、もう一撫で。

「この石塔を齋いっき込むもくろみだ。その堂がもう出来て、切組みも済ましたで、持込んで寸法をきつちり合わす段が、はい、ここはこの通り足場が悪いと、山門内うちまで運ぶについて、今日さ、この運び手間だよ。肩がわりの念入りで、丸太棒まるたんぼうで担かつぎ出しますに。――

丸太棒めら、丸太棒を押立おったてて、ごろうじませい、あすこにとぐろを巻いていますだ。あのさきへ矢羽根をつけると、掘立普請とぎの齋ときが出るだね。へい、墓場の入口だ、地獄の門番……はて、飛んでもねえ、肉親のご新姐ごしらつしござらつしやる。」

と、泥でまぶしそうに、口の端はたを拳こぶしでおさえて、

「——そのさ、担ぎ出しますに、石の直肌じかはだに繩を掛けるで、藁わらなり蓆むしろなりの、花ものの草木を雪囲いにしますだね、あの骨法でなくば悪かんべいと、お客様の前めえだけんど、わし一応はいうたれども、丸太棒めら。あに、はい、墓つとさ苞といり入いりに及ぶもんか、手間障ざいだ。また誰も見ていねえで、構いごとねえだ、と吐こいての。

和尚様は今日は留守なり、お納所なっしょ、小僧も、総そうど齋きに出さした。まず大事ねえでの。はい、ぐるぐるまきのがんじがらみ、や、このしよで、転かたがし出した。それさ、その形かたでがすよ。わしさ屈かがみ腰こしで、膝はだかつて、面つらを突出す。奴等やつら三方からかぶさりかかつて、棒を突挿つそうとしたと思わつせえまし。何と、この鼻の先、奴等の目の前へ、繩目へ浮ういて、羽はさ弾はじいて、赤蜻蛉せきせうが二つ出た。

たつた今や、それまでというものは、四人八ツの、団栗どんぐり目まなこに、糠ぬか虫むし一疋入らなんだに、かけた繩さ下から潜くぐつて石から湧わいて出たはどうしたもんだね。やあやあ、しっしつ、吹くやら、払いますやら、静じつとして赤蜻蛉せきせうが動かねえとなると、はい、時代違いで、何の気もねえ若い徒ても、さてこの働かきに掛かつてみれば、記念碑系塚の因縁さ、よく聞いて知しつてるもんだで。

ほれ、のろのろとこつちさ寄よつて来るだ。あの、さきへ立つて、丸太棒をついた、その

手拭てぬぐいをだらりと首へかけた、逞たくましい男でがす。奴が、女※の幽霊でねえか。出たツと、また髻ひげどのが叫ぶと、蜻蛉がひらりと動くと、かつと二つ、灸きゅうのような炎が立つ。冷い火を汗に浴びると、うら山おろしの風さ真黒まっくろに、どつと来た、煙の中を、目が眩くらんで遁にげたでござえますでの。……………

それですがすもの、ご新姐、お客様。」

「それじゃ、私たち差出た事は、叱言こごとなしに済むんだね。」

「ほつてもねえ、いい人ひと扶たすけて下せえましたよ。時に、はい、和尚様帰つて、逢わつせえても、万々沙汰なしに頼みますだ。」

そこへ、丸太棒が、のっそり来た。

「おじい、もういいか、大丈夫かよ。」

「うむ、見せえ、大智識さ五十年の香染こうぞめの袈裟けさより利益があつての、その、嫁菜ちりめの縮ちりめの裡なかで、幽霊はもう消滅だ。」

「幽霊も大袈裟だがよ、悪く、蜻蛉たたに祟たられると、瘡おこりを病むというから可恐おっかねえです。縄をかけたら、また祟つて出やしねえかな。」

と不精髻の布子が、ぶつぶついった。

「そういう口で、何で包むもの持って来ねえ。糸塚さ、女※様、素で括くくつたお崇りだ、これ、敷松葉の数寄屋すきやの庭の牡丹に雪囲いをすると思えさ。」

「よし、おれが行く。」

と、冬の麦稈帽むぎわらぼうが出ようとする。

「ああ、ちよつと。」

袖を開いて、お米が留めて、

「そのまま、その上からお結いなさいな。」

不精髻むぎわらが——どこか昔の提灯屋に似ていたが、

「このままでかね、勿も体つてい至極もねえ。」

「かまいませんわ。」

「構わねえたつて、これ、縛るとなると。」

「うつくしいお方が、見てる前で、むぎとなあ。」

麦藁むぎわらと、不精髻むぎわらが目を見合つて、半ば眩つぶやくがごとくにいう。

「いいんですよ、構いませんから。」

この時、丸太棒が鉄のように見えた。ぶるぶると腕に力の漲みなぎった逞たくましいのが、

「よし、石も婉軟やんわりだろう。きれいなご新姐を抱くと思え。」

というままに、頸くびの手拭てぬぎが真額まっこうでピンと反そると、棒をハタと投げ、ずかと諸手を墓にかけた。袖の撓しなうを胸へ取った、前抱きにぬつと立ち、腰を張って土手を下りた。この方が掛かり勝手がいらしい。巖路いわみちへ踏みはだかるように足を拵いげ、タタと総身に動揺いぶりを加れて、大きな蟹が竜宮の女房を胸に抱いて逆落しの滝に乗るように、ずらずらずと下りて行く。

「えらいぞ、権太、怪我をするな。」

と、髯ひげが小走りに、土手の方から後へ下りる。

「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に。」

と、お米を見返つて、ニヤリとして、麦藁むぎわらが後に続いた。

「頓生とんしょう菩提ぼだい。……小川へ流すか、燃くしますべい。」

そういつて久助が、掻き集めた縄くずの屑くずを、一束ねに握もって腰もとを擡たげた時は、三人はもう木戸を出て見えなかつたのである。

「久……爺や、爺やさん、羽織はね。式台へほうり込んで置いて可いいんですよ。」

この羽織が、黒塗くろぬりの華頭窓かかどまどに掛かつていて、その窓際の机こたてに向むつて、お米は細ほりと坐まつて

いた。冬の日は釣瓶つるべおとしというより、梢こすえの熟柿じゆくしを礫つぶてに打って、もう暮れて、客殿の広い畳が皆暗い。

こんなにも、清らかなものかと思う、お米の頸えりを差さし覗のぞくようにしながら、盆に渋茶は出したが、火を置かぬ火鉢越しにかの机の上の提灯を視みた。

（——この、提灯が出ないと、ご迷惑でも話が済まない——）

信仰に頒布する、当山、本尊のお札を捧げた三宝かたわらを傍すざりばこに、硯箱すざりばこを控えて、硯の朱の方に筆を染めつつ、お米は提灯に瞳を凝らして、眉を描くように染めている。

「——きつと思いついた、初路さんの糸塚に手向けて帰ろう。赤蜻蛉——尾を銜くわえたのを是非頼む。塗師屋さんの内儀でも、女学校の出じやないか。絵というど面倒だから図画で行くのさ。紅べにを引いて、二つならべれば、羽子の羽でもいい。胡蘿蔔にんじんを織に松葉をさしても、形は似ます。指で挟んだ唐辛子でも構わない。——」

と、たそがれの立籠めて一際漆のような板敷を、お米の白い足袋の伝う時、唆そそのかして口説いた。北辰妙見菩薩ほくしんみょうけんぼざつを拜んで、客殿へ退ひく間まであつたが。

水をたつぷりと注さして、ちよつと口で吸つって、唇つぼみをぼつり黒く、八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらつた。瀬戸の水入が渋のついた鯉あつちだったのは、詭あつちえたようである。

「出来た、見事々々。お米坊、机にそうやった処は、赤絵の紫式部だね。」

「知らない、おっかさんにいいつけて叱らせてあげるから。」

「失礼。」

と、茶碗が、また、赤絵だったので、思わず失言を詫^わびつつ、準藤原女史に介添してお掛け申す……羽織を取入れたが、窓あかりに、

「これは、大分うらに青苔がついた。悪いなあ。たたんで持つか。」

と、持ったのに、それにお米が手を添えて、

「着ますわ。」

「きられるかい、墓のを、そのまま。」

「おかわいそうな方ですもの、これ、しのぶずり葱摺すりですよ。」

その優しさに、思わず胸がときめいて。

「肩をこつちへ。」

「まあ、おじさん。」

「おっかさんの名代だ、娘に着せるのに仔細しさいない。」

「はい、……どうぞ。」

くるりと向きかわると、思いがけず、辻町の胸にヒヤリと髪をつけたのである。

「私、こいしい、おつかさん。」

前まへ刻さつきから——辻町は、演芸、映画、そんなものの楽屋に縁がある——ほんの少々だけけれども、これは筋にして稼げると、潜ひそかに悪心の萌きざしたのが、この時、色も、慾よくも何にもない、しみじみと、いとしくて涙ぐんだ。

「へい。お待遠でござりました。」

片手に蠟ろうそく燭そくを、ちらちら、片手に少しばかり火を入れた十能を持って、婆さんが庫裏くらから出た。

「糸塚さんへ置いて行きます、あとで気をつけて下さいましよ、烏が火を銜くわえるといいますから。」

お米も、式台へもうかかった。

「へい、もう、刻限で、危あぶなげ気はござりましねえ、嘴ふと太と鳥も、嘴ほそ細そ鳥も、千羽ヶ淵の森へ行いんで寝ました。」

大城下は、目の下に、町の燈ひは、柳にともれ、川に流るる。磴いしだんを下へ、谷の暗いように下りた。場末の五燈しよくはまだ来ない。

あきない帰りの豆腐屋が、ぶつかるとように、ハタと留った時、

「あれ、蜻蛉が。」

お米が膝について、手を合せた。

あの墓石を寄せかけた、塚の糸杵の柄にかけて下山した、提灯が、山門へ出て、すこしずつ高くなり、裏山の風一通り、赤蜻蛉が静そつと動いて、女の影が……二人見えた。

昭和十四（一九三九）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四巻」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日第1刷発行

※「切燈籠」と「切籠燈」の混在は、底本と底本の親本の通りなので、そのままとしました。

入力：門田裕志

校正：多羅尾伴内

2003年9月3日作成

2008年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

縷紅新草

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>